

ただ、それだけなんだ。

もう恋なんていやだ。
もう自分から積極的に出るのはいやだ。
これからも心の中で彼女を思う事はあると思う。
しかし、それは、自分で夢とあきらめが付き、
勉強の方に身が乗ると思う。

家の土間の板の間まででもいいのに、
家の戸口まででいいのに、
表門まで、彼女は僕を送ってくれた。
「遠くから来てもらって、ごめんな。」
と何度も言ったが、どう言うつもりで
言っているのか、わからない。
彼女の気持ちがあくわからなくなった。
その時、大人になった僕は、
迷っている今の僕に話かける。

彼女がどう思うよりも、
どう僕が思うかだ。
それを彼女にどうわかってもらうか、
努力し、僕を受け入れてくれる迄。
努力し、献身するのが、男なんだ。
もう遅すぎるなんて、馬鹿な！
まだまだ、早すぎるんだ！
これからなんだ、まだ、先は長いのだ！

ものすごい音を立てて、京阪電車がそばの鉄橋をまた通過した。
僕は立ち上がり、その通った後の線路を見つめた。



僕は後悔していない